

「岡崎で子どもを育てるということ」

岡崎女子短期大学

教授 林 陽子



1. 今、子育てが難しくなっているとされていること

ご紹介を頂きました岡崎女子短期大学におおよそ31年半ぐらい勤め続けております林と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。岡崎学全体は、文化とか歴史などが多ございますので、今日のテーマはちょっと異色かなという感じがいたしますが、本日は岡崎で子どもを育てるとっていったいどういう事なのかなという事を考えてみたいと思います。私は乳児保育とか保育原理が専門ですので、岡崎で子どもを育てるという事について積極的な面も含めて考えてみたいなと思っております。

まず、受講されていらっしゃる皆様方が、今どんなふう感じていらっしゃるかわかりませんが、色んな報道等々によりますとどうも現代というのは子育てが難しい、あるいは難しくなっているという事が良く言われると感じています。その一つの理由としては、子どもが被害者になるような犯罪とか事故も多いですし、それから加害者になるようなケースも多いというような事もあります。また、交通事故に巻き込まれるケースもあつたり、いじめの被害者になつたり、あるいは加害者になるという事もあつたりして、子育てが大変難しいなあという感想をお持ちの方が多いと感じております。

それをちょっと整理してみますと、まず、人並みに育てる事が難しいんじゃないかと言われてます。飛び抜けて秀才に、とか飛び抜けて天才に、とは思わない、とりあえず人並みに、と思うんですけど、その人並みというのがちょっと難しいと感じていらっしゃる方が多いという事なんだろうと思います。

それから失敗が許されない。先日の教育改革の会議におきまして、いじめの加害者になった子どもの親御さんについても責任を問うというようにしたらどうかなんて議論されているわけですから、そういった意味でも失敗が許されない。もしも育ちの中で何か課題があつたり問題があつたりしますと、それはどうも親の責任である、とりわけ母親の責任が重大であるというような事も言われたりします。

それからたいへんなお金がかかる、とも言われます。ひとりの子どもを育てあげるのに、少なく見積もっても1,000万円はかかるという事です。じゃあ子どもがいなければ1,000万円貯金が増えるのかといえ、私は2人の子どもを育てましたけれども5人育てる所を2人育てたので3人分、つまり3,000万円貯金が増えさせているかということ、そうはいかないわけですね。いなければいなり使っていくんだらうなと思うわけです。とにかく少なく見積もっても1,000万円はかかるというふうにも言われている世の中でございます。これもかかるのではなくて、「かけるからなんだ。別に1,000万円もかけようと思わなければかけないで育ていくんではないか」と、ご主張される方もいらっしゃいますが、周りのお金のかけ方をみますと、我が家だけかけないのはなかなか難しいような事情があるんじゃないかなと思っております。

それからですね、先ほどちょっと事件とか事故のお話をいたしましたけれども、危険がいっぱいで大変不安感が煽られるというところがございます。私は愛知県の公安委員

を昨年の7月までの任期で3年間お務めをいたしました。毎週委員会というのが開かれておりましたが、その会議の中で、やはり思春期までの子ども達の絡んだ事件ですとか、あるいは事故等々が挙げられてまいりました。思わぬ所に落とし穴があるという事も私どもは教えて頂いたわけです。例えばですね、大型ショッピングセンターの外にあるトイレ、これが非常に危険だとデータの中では出ております。親の意識はショッピングセンターの外にトイレがあっても、中のトイレというふうな感じを持ってしまいうんですね、意識としては。ところが犯罪者にしてみれば親の目も届かない、それから従業員の目も届かない、恰好の場所というふうに写らしく、そういう所が非常に危険だっというお話も伺ったり、また交通事故の話も、大変悲惨な例も聞かせていただいたわけです。そういう事で、危険がいっぱいというように何となく感じていらっしゃる方も、データとして判っていらっしゃる方もたいへん多いんじゃないかなと思うんですね。

それから5番目といたしましては、子育てを助けてくれる人が少ないんじゃないかと。実家のお父さんとかお母さん、それから配偶者のお父さん、お母さんという戦力がありますが、これもまだ現役世代のおじいちゃん、おばあちゃんだったり、それから遠くに住んでいるとかいう事になりますとなかなか手助けしていただけないという事もあるわけですよね。私も2人の子どもをかつて育てました。もう35歳と33歳の息子と娘です。孫がひとりいるんですけれども、これが4歳半ぐらいになります。「仕事を辞めて子育て手伝ってね、子どもの世話してね」と言われると、ちょっと迷うような状況がございますね。まだ現役でまだ定年になっておりませんから。そんな訳でおじいちゃん、おばあちゃんも、色んな意味でなかなか子育ての助っ人になりにくい状況もあります。そういう事だけではなくて、若い方々がおじいちゃんおばあちゃんの子育てというものを、頼りにしているようなしていないような部分もあるらしいという事もあります。そういうような様々な事が色んな所で報道されますので、若い人達が、「何か子育てって難しそう、大変そう」とか、「何か自信がないわ」とか、「もし失敗したらどうしよう」というふうに、子育ての楽しさといひましようか、子育ての面白さよりも不安とか自信のなさということを先に考えてしまうような、そういう傾向があって、現代は子育てがしにくい社会だというふうに言っているのではないかなと思うわけですね。

一方で、昔と言いましようか、30年前とか50年前とかっていうのを考えてみますと、子育てが難しかったとかあるいは大変だったとか、楽しかったっていう事を子育てしている真っ最中に感じる余裕はあまり無かったんじゃないかなと思うんですね。本日の受講されている方々をざっとお見受けした所、「30年ぐらい前に子育てしたわ」とか、「15年ぐらい前に子育てしたわ」という方が多いようで、真っ最中という方は非常に少ないのではないかなと思うわけですが、いかがでございますか。子育て中を振り返っていただきますと、今になって面白かったとか、ああ楽しかったってのはあると思うんですけれども、その子育ての真っ最中に、大変だったわとか面白いわって言えるような余裕があんまり無かったと言いましようか、そんな感じじゃないかなと思うんですね。私も振り返ってみると、悩んだり困ったりした時に結構逃げ道があったと思うんです。それは例えば職場の同僚が、「ああ、林さんそんなのどこの家でもある事よ」とこう一言いってくると、「へえ、あの大先輩の家でもそういう事があったのか」というふうに思ったりとかしました。それからもうちょっと年上の方にそういうお話をいたしま

すと、「ちょっと先祖のなせる技じゃないの」とかいうのがありまして、そうかもう目の前にいない先祖が何かやっているとすると私が努力してもしょうがないんだなというふうに諦めるのに非常に都合の良い存在が幾つかあったりもしました。そんなのがありまして、あんまり悩んだとか大変だったとかいうふうな事は無かったのではないかと、思うんですね。もっとも、細かい所ではたくさんありましたけれども、深刻に悩むっという事はあんまり無かったような気がいたします。

2. 子どもが育つということ、育つのに必要なこと

さて、昔と今とで子育ての感じが随分違うわけですが、子どもが育つという事、あるいは育つために必要な事というのは、あまり時代を経ても変わってないんじゃないか、変わらないんじゃないかと私は考えております。

まず子どもが育つというのはどういうことかといいますと、これは私の意見でございますけれども、二つ側面があると思うんですね。ひとつは大きくなるという事です。身長が伸びるとか体重が増えるとか色々な所で大きくなったなあ、育ったなあというのを感じる事があります。私も2人の子育てをしました。もっとも「子育てをした」というと子どもがクレームつけるんですよ。「お母さんって全然まともにやってなかったじゃない。私は保育園とお父さんに育ててもらったんだ」といいいます。まあ、あなたが嘘ではないんですけどもね。それはちょっと置いておきまして、一応私本人としては育てたという感覚はございます。その時に、やはり子どもが大きくなったな、成長したなっていうのを一番感じたのは足の大きさでした。皆さんはいかがですか、どんな所で大きくなったとお感じになったのでしょうか。とにかくどんどんどん靴が小さくなったって言うか、足が大きくなって。それでですね、27センチぐらいになったときには、もう感動っていうよりも率直にいますとぞっとしたっていうのがありました。私が生んだ3,460グラムの可愛い僕ちゃんはどこに行ってしまったんだろうと。いつの間に27センチの靴をしかも踵を履き潰し、何か先がパクパク空いているようなのを平気で履いていくような人になってしまったんだろうかっていうのを改めて感じた事がありまして、足が大きくなるというのが私にとっては一番大きなポイントだったのかなというふうな感じがいたします。

もう一つの側面は出来るようになるという事です。これは皆さんも色々思い出がおありになると思います。初めて立って歩き始めた、あるいは言葉を喋り始めた、あるいは三輪車に乗れるようになったとか色々な事が出来るようになってきて、ああうちの子も随分育ってきたな、成長したなっていうふうにお感じになった事があるのではないかなと思います。

但しこれは、大きくなるという事につきましても、身長だけ大きくなるとか体重だけ大きくなるというのはちょっとバランスが悪い。最終的にはバランスが取れるという事が大事なんでしょうと思います。しかしながら、出来るという事についてのバランスというのはなかなか難しい部分もありますし、子どもにとってはしんどい部分もあるのではないかなと思います。例えばお手洗いに行くという事が自分で上手に出来るようになる前から、何だか英語耳を作らなきゃいけないという事で英語を一生懸命教えられるとかですね、まだしっかり座る足腰がないのに礼儀作法を教えられるとかですね、ちょっと

こうアンバランスなしつけというか教育というか、そういうのがなされると子ども自身もちょっとしんどい所があるのかなという感じもいたします。

いずれにしても大きくなるという側面、それから色々な事が出来るようになるという側面、この両方の側面がそれぞれバランスの取れた育ち方をしていくという事が必要なんだろうなと思うわけです。

じゃあそのために何が大事なんだろうか、ということです。それは、“栄養・睡眠と休養・活動（遊び・しごと・学習）・衛生・安全等 安心基地（無条件の愛情・信頼・受容・無限の表出）です。 についてはあまり心を用いなくてもという言い方は語弊がありますが、割合知識とか技術があればやれていくところなんですね。例えば栄養をどういうふうにしましょうかとか、あるいは朝型の生活リズムにするにはどうしたら良いでしょうかとか、あるいは予防注射をどんなふうにしましょうかとか。今年もそろそろインフルエンザの予防接種の時期になりましたが、予防接種どうしましょうとか、まあそういう事は知っていれば、あるいは技術があれば色々やれていく事であろうというふうに思います。安全の確保もそうですね。ここは危険だからこういう所では絶対子どもから目を離さないとか。事故っていうのは外でおきるような感覚がおありの方もいらっしゃるかもしれませんが、子どもの転落とか転倒、それから窒息、それから溺死というような事故は意外に家庭の中で起きる件数の方がずっと多いんです。でもそれも知っていれば防げる事です。ですから栄養がしっかりあって、そして朝型の生活リズムで睡眠がしっかり取れて、そして衛生状態が良くなって予防接種も出来て安全が確保されていて、そして、十分な活動があれば大丈夫ということになるわけですね。活動というのは、遊びとか仕事とか学習ということです。

もっとも、2歳や3歳の子が仕事をするかっていうと大人のような仕事はしませんですね。むしろ仕事なんかしてくれない方が親としては助かるわけです。私も子どもに「あなたのお手伝いはじっとしている事」と何度か聞いたか知りません。けれども、まあとにかく何かやりたがりますよね。子どもは、お仕事という言葉が大好きですね。

2年程前の話になりますが、ある幼稚園に遊びに行きました。幼稚園とか保育園に遊びに行くのも私のひとつのお仕事なんですよ。私は遊びと仕事が一体化しているという非常に恵まれた境遇にあるわけですが、その日も幼稚園に遊びに行きました。園庭に東屋といいたいでしょうか、小さな小屋みたいなものがあって、そこで5歳の子どもがお家ごっこをしておりました。この東屋を拠点にいたしまして、お決まりのお父さん役の子、お母さん役の子、それからバブちゃん バブちゃんわかりますか、赤ちゃんですよ がいました。そしてこの頃の傾向ですが、必ずといっていい程ペット役がいるんです。それも猫が多いんですね。お父さんになりたい、お母さんになりたい、バブちゃんになりたい、お姉さんになりたい子どももいますが、それよりもペットになりたい子が圧倒的に多いそうです。何故かっていうと、ペットはお仕事しなくていいし、あんまり叱られないんですね。どうして猫がいいのかっていうと子どもに聞いてみると、猫っていうのはひたすら寝てればいいからいいというんですね。これを可愛いらしいとか微笑ましいといっているのか非常に私としては心配なところなんです。まあとにかくペットがいるわけですから、お家ごっこの中に、そうしましたらお父さん役の子がお仕事に行くんですよ。三輪車に乗って園庭を一周してくるんです。そして「ただいま」と帰ってきます、この

東屋のお家にね。そうするとお母さん役の子が何ていったか。「あらもう帰ってきたの。もう一回行ってらっしゃい。」って。お父さん役の子は多分その子のご家庭を反映していると思うんですが、「はい。」と素直にもう一周してきました。「ただいま。」と帰ってきましたらお母さん役の子が「おかえりなさい。」とって、そこから先は「ご飯にしましょう。」とってカレーライスが出てきたり、「お風呂に入りましょう。」とってブロックのような石けんで擦ってみたりとか色んな場面があったんですけども。お家ごっこやお母さんごっこ、色んなごっこ遊びがありますが、そのごっこ遊びの中でやはりお仕事に行くというのは子どもにとって大変魅力的な事のように映っているようです。

何年か前に私のゼミ生を動員して、付属幼稚園の年中、年長さんにインタビュー調査をしてもらった事があります。それは、お父さんは好きですか、お母さんは好きですか。お父さんのどんな所が好きですか。お母さんのどんな所が好きですか、ついでに嫌いな所はどこですか。みたいな感じで聞いてもらったんですね。そうしましたら、好きっていうふうに答えた子が全部で、嫌いとお父さんお母さんはひとりもいませんでした。お父さんの好きなおところっていうので断トツで多かったのがお仕事をしている所ということでした。小学生に調査をいたしますとまた違った回答が出るんです。これも一度やったことがあるんですが、お父さんの嫌いな所っていうのに疲れている所っていうのが出たんですね。幼児はそれは出ておりません。お仕事をしている所、勉強をしている所、遊んでくれる所、キャッチボールしてくれる所。お母さんについても、お仕事をしてくれる所、あるいはスカートを作ってくれる所、ホットケーキを作ってくれる所とか、非常に微笑ましいというか、そのお子さんが家庭でとても大事にされているという、そういう姿が大変良く判る結果になりました。その中でもですね、子どもというのは親の仕事というものに大変関心を持っていて、仕事をしている親の姿というのは大変恰好良く映っているという事が判ったわけでございます。

話を元に戻しますが、この活動の中でも子ども自身が仕事をするというと、これは例えば給食の当番であったり、チャボの当番であったり、折り紙を配る係であったりと、そういうことがお仕事というふうに映るわけですけども、いずれにしても自分がやるお仕事にしても親の仕事にしても大変恰好良い姿として映っているという事がありますね。まあしかし、結論的に言うと、仕事も遊びのうちという事になるわけですけども。

次の学習という事でございますが、これはですね、皆様方良くご存知のように、子どもは遊びの中で色んな事を学んでいきます。私は、よく父さんお母さんに申し上げるんですけども、「子どもの学習は？（ハテナ）マークから始まるんですよ。」と。2・3歳ぐらいのナゼナ二時代の始まりというのがあるんですが、このナゼナ二時代のナニの部分ですね。これ何？、あれ何？、の時代はまだいいんですが、これが、何で？ どうして？時代になりますと、非常に返答に窮する所が出てまいりますね。「これ何？」、「コップ。正しくは紙コップ。」なんていいますとね、「何で紙なの？」とこう来るわけですね。「多分洗わなくてもいいからじゃない。」「何で洗わなくて良いの、洗ったっていいじゃない。」とかね。「何でここにコップがあるの。」とかね。いろんな何で攻撃がいっぱい来ますよね。何で、とかあるいは、どうなっているの、と最後？マークで終わるよ

うな心持ち、気持ち、ここから学習が始まるといってもいいと思います。そして、？マークの次に来るのはですね、！（ビックリ）マークといいましょうか。！マークというのは嬉しいとか面白いっていう！マークもあるんですが、なるほどそうかというのがこの！マークなんです。ですから「どうして？」と聞いて、これこれかくかくしかじかという説明をもらった時に、「ああそうなのね、なるほどね。」というのがこの！マークなんです。この！マークの所で初めて知識とか、知恵とか、こうやればいいんだっていう技術が身についていくんです。ですから？マークが無いままにこうやりなさい、ああやりなさい、英語はこう喋るんですよ、九九の練習をしましょってというような事が先行してしまうと、！マークもないんですね。やはり幼児期の学習というのは？マークと！マークに充ち満ちたものだと私は考えているわけです。？マークとか！マークを伴わない学習というのは、子どもにとってストレスだという事がいえるのではないかなと思っています。

今、子どもが育つ為に必要な事という事で、色んな事を申し上げましたが、最も必要なものは何か、と言いますと、「安心基地」というものです。安心基地と申しますのは無条件に自分の事を愛してくれる人という意味です。例えば「100点取ったらね。」とか、「良い点取ったらね。」とか「お利口さんにしてたらね。」という条件付きで可愛がってもらおうという事ではなくて、どんな結果になろうとも、どんな姿であろうともあなたは私の大事な宝物と言い切ってくれる人、これが安心基地でございます。そこでは本当に揺るぎのない信頼関係がありますし、それからまた全てを丸ごと受け入れてもらうという受容の関係がございます。そして子どもの方からすれば、どんなに泣いてもわめいても我が儘を言っても見捨てられる事はない、愛してくれているんだ、この人の愛情は続くんだというふうに子どもが自信が持てるという存在です。これが安心基地といわれているものです。食生活が少々いい加減であっても、少々夜型であっても、少々早期教育で色々詰め込まれても大丈夫なんです。基本的にこの安心基地があれば、です。

だけど、栄養の管理がしっかりしていて、夜8時には寝て、朝6時半には起きますっていう規則正しい生活があっても、安心基地がないとなると、子どもは十分には育っていかないのです。これは、例えばまったく安心基地と思える人がいないところで育ったお子さんと、たとえ里親さんであっても里親さんを安定した安心基地と思って育ったお子さんとの比較などからもいえることなのです。必要なのは安心基地 - 「安全基地」というふうにおっしゃる方もありますが、私は安全基地というよりは安心基地の方が言葉のニュアンスとして好きなものですから、安心基地といいますが - なのです。

子育て中の方もそうでない方も、子育て真っ最中の時は、「私はしっかりした安心基地です」とか「私が安心基地だったのよ、子ども達にとっては」といい切れませんか。ちょっとあやしいでしょうか。でもこれは私達親の立場で自覚するものではなくて、子どもがそう思うかどうかなんです。ですけど今日帰って、「あなたの安心基地って私だった？」って聞かないで下さいね。違うと言われた後のバトルについて、私は責任を負いませんので、あんまり聞いて頂きたくないわけですが、おそらくお聞きになればお子さんは「そうです。お母さんが安心基地です。」とおっしゃると思います。

ところで、面白い事に安心基地はひとつではないんですね。皆さんもご経験があると思いますが、安心基地は3つとか4つとか5つとかあるんです。10も20もある子ども

はあんまりいません。大体最大5つくらいまでですね。そして、この安心基地は時と場所によってランキングが変わるんです。お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんもいると、大体穏やかな時間帯ではお母さんが安心基地ナンバー1です。でもお母さんに怒られるとおばあちゃんが安心基地ナンバー1。お母さんが出張か何かでいなくなっちゃうとお父さんが安心基地ナンバー1、でもお父さんもいなくておばあちゃんが助っ人で来てくれるとおばあちゃんが安心基地ナンバー1、おばあちゃんもいないとなると、おじいちゃんが安心基地ナンバー1とかがってなりますね。保育園に行きますと担任の先生が安心基地ナンバー1。でも担任の先生がお休みすると、もしかしたら園長先生が安心基地ナンバー1とかね。給食のおばちゃんが安心基地ナンバー1とかそういうようなお子さんもいらっしゃいます。それが普通の子どもです。安心基地を幾つか持っている、その安心基地にはランキングがあって、ランキングは時々変わるとというのが子どもの姿なんです。だけど安心基地が0っていうのが、子どもにとっては悲しい事、切ない事と言ってもいいと思います。

2年ぐらい前にこういう調査の結果を私は見た事がございます。非行を犯した少年と非行を犯してない少年 - 犯していない少年の方が圧倒的に多いんですけども - に対して、大学の方が調査をなさったんですね。「あなたが非行を犯したら悲しむ人は何人居ますか？」という、実に切ない調査です。非行を犯していない少年達 - 少年の中には女の子も含まれますが - は、何人と答えたでしょう。3人の人も居ました。5人の人も居ました。6人の人も居ました。でも最低でも3人です。多い人は7人とか8人とか10人以上とかね。ところが非行を犯した少年にその質問をしてみると、0または1なんです。私ね、その調査結果をいただいて本当に涙が出るような思いがいたしました。自分の為に悲しんでくれる人が0か1、つまり安心基地と言える人が0か1っていう人生ってどうよ、という感じですよ。それも12歳とか13歳とか15歳の少年達ですよ。もう話しているうちに私も本当に涙が出てくるわけですけども、本当にこの安心基地の存在というのは大人が考える以上に子どもにとっては重要な存在だというふうに思うんですね。

さて、ここまでをひとつの柱といたしまして、少し視点を変えてみましょう。

3. 岡崎市の状況

次は、今岡崎市の子育て状況はどんな具合かという事でございます。15歳未満の人口と65歳以上の人口を比較するとその社会がまだまだ若い社会なのか、かなり高齢化が進んでいる社会なのかという事のバロメーターになるという考え方がございます。全国のデータを調べてみますと、今年の初めてでございますけれども、なんと15歳未満が14%弱です。100人の中で14人もいないんです。一方で65歳以上は20%を超えていますから、この時点で新聞報道では「5人に1人が高齢者」と強調されました。ところが同じ指標で岡崎市を測ってみますと、これはもう皆さんご存じのように、市の広報にも出ておりますし、それから市のホームページにも出ておりますので、ご覧頂ければすぐ判る事でございますけれども、何と岡崎市は15歳未満の方が65歳以上よりもほんの少々多いんです。コンマ何パーセントの話ですからいつ逆転するか判りませんが、15.72%が15歳未満です。一方で65歳以上は15.4%という事でございます。ただ平均

寿命からいうとほとんど全国と岡崎市は同じでございますので、岡崎市の方が特に長生きの方が多いう事になるのかどうかちょっと判りませんが、いずれにしても若い町かそうでない町かというふうな判定をいたしますと、岡崎市はまだまだ若い町とっていいのではないかなと思います。若い町であるという事はどういう事かと言いますと、比較的多くの子どもが生まれてくるか子連れの夫婦が岡崎に引っ越してくる、このどっちかですね。子連れの夫婦が岡崎に引っ越してくる時には、「岡崎って結構良い所じゃない？子育てに優しい所じゃない？」というような情報で引っ越して来られる方もいらっしゃるのではないかなと思うんですね。岡崎って給料がよさそうだとか、岡崎って稼げそうだっていうような指標で引っ越されて来られる方もあるかもしれませんが、まずやはり子を持つ親としてはその土地が、子育てに優しい町であるかどうかという所をひとつの指標にするのではないかなと思うのです。そういう意味では生むという事についても積極的に捉えられる町だし、子連れで引っ越して来るという点で考えても積極的に考えられる町というように意識されているのではないかなと非常に乱暴な推論ですけども、この数字からいえる事ではないかなと思います。

しかしながら、この先も安心していただけるかといいますと、実はそうばかりでもなくて、未婚率というのは実は岡崎市でも年々上がっております。20代と30代でまだ結婚していない人が増えているという事なんですね。これは結婚しないのか、したくないのか、したいんだけどなかなか出来ないのか、どうなんだろう分かりません。この未婚の背景というものを探る必要があるわけですね。そこで、結婚についての考え方という事で、次の図を見て頂きます。【図 未婚者の結婚についての考え方】これも岡崎市のデータでございますが、20代30代の未婚の方達に結婚をどう考えているかという事で調査をした結果でございます。出来ればすぐにでも結婚したいという方も1割から1割ちょっといらっしゃいます。でもいずれは結婚したいという方が男性も女性もまあ7割から6割半ぐらいという事でございます。結婚はしたくないけど人生のパートナーとなる人が欲しい。ここがちょっと微妙でございますけれども、まあ数が少ないので一応これはあまり深く考えない事にいたしまして、結婚はどちらでも良いというふうに考えていらっしゃる方、これも15%弱いらっしゃいます。

この表から見てまいりますと、出来ればすぐにでも結婚したいなという方はパートナーとなるべき方に出会えばすぐに結婚されると思うんですけども、いずれはという方が結構微妙なんですね。聞かれればいずれはと答えるけれども、そのいずれっていうのがいつまで続くのかっていう事については、答えている本人もあまり見通しが無い。40代になってもいずれはって答えるかもしれないというそういう方達なんですね。どちらでも良いというのははしなくても良いというふうには振れているんじゃないかなという感じもいたします。その他無回答という事になるわけでございますが、結局未婚っていうのはそのうち結婚するかもしれないというのが未婚なんです。未婚というのは未だ結婚せずという意味ですから。これに対して最近使われている言葉で非婚という言葉がありますね。結婚しないという強い信念なんですね。政府のいろんなデータを見てみますと、未婚、非婚というのをひっくめて結婚していないという事で処理をしておりますが、この岡崎市のデータでは、「結婚したくない」という回答が非婚になるわけですね、この中では。とにかく、「私は結婚しませんよ」という人達を非婚というのですが、

最近のデータでは非婚が少し減ってきています。一時期さっと増えたんですけども、ちょっと減っているんじゃないかなという報告もあります。つまり30代終わりで結婚して40代そうそうで子どもを持つという方がちょっと増えているんじゃないのか、という報告もありますので、まだこの辺の未婚、非婚のデータは非常に動いているといってもいいと思います。

結婚適齢期という言葉がまだ生きていた時代は、売れ残ったクリスマスケーキとか、31歳超えると大晦日よと言ってみたりですとか、そういう時代があったんですが、本当に何年か前ぐらいからそういう言葉ももう聞かなくなって、そんなに無理して結婚しなくてもいいんじゃないの、独身のままでいいんじゃないのというふうに考えちゃう親御さんも増えてきたという事も背景にはあるようですね。

次に合計特殊出生率について全国と愛知県と岡崎市を比べてみます。【図 合計特殊出生率の推移】合計特殊出生率というのは、女性が一生の間(15歳以上49歳まで)に平均して何人子どもを生むんでしようかということでございます。これは社会の状況によって違うんですが、2.02とか2.07ぐらいまでの合計特殊出生率があれば人口を維持する事が出来ると言われていたんですね。ところが色々な報道がありますように、昨年ついに人口減少時代に入ったという指摘がありましたね。それはこの合計特殊出生率の低下傾向がずっと続いているからなんですね。去年は全国で1.26ぐらいになってしまいました。岡崎という所は先ほど言いましたように、どっちかといえば若いといえるものですから、それは合計特殊出生率が他の地域と比べて高いという結果も生み出しています。逆が真かかもしれませんが、合計特殊出生率が高いので若い町だと言ってもいいのかなと。その方が正確かもしれませんが、とにかく言える事は全国的に見ても愛知県内で見ても岡崎市という所は子どもを生みやすいというのか、たくさん生まれているというのか、それから人口構成だけでいうと小さいおさんを連れて引っ越していらっしゃる方も多いという事もいえるんじゃないかと思います。

4. 子育て支援が全国規模で展開されている・・・

岡崎は、どちらかといえば子どもが多いといえるんですが、先ほど見ていただきましたように、結婚はしてもしなくてもいい、あるいは今のところ結婚しませんという方がどんどん増えているし、合計特殊出生率も他と比べれば高いのですが、傾向としては低下の方向にあるということですね。

これを全国的に見た時に、どのような施策が講じられてきたのかという事でございます。皆様ご存知のように平成15年7月に次世代育成支援対策推進法という大変長い法律が成立いたしました。この前にはエンゼルプランとか新エンゼルプランとか色々なプランが出されましたが、どんなプランを出しても少子化傾向が止まらなかったんです。かくなる上は法律を作りましょうという事で、次世代の子どもたちを育成する、そういう支援の対策を推進しなきゃいけないという法律ができました。この法律は政府も自治体も企業も、特に従業員が301人以上の企業においては、次世代育成支援対策推進の行動計画 - アクションプラン - を作らなきゃいけないというふうに法律の中で定められました。要するに子育てを支援するという事を一生懸命やりましょう、これを行動計画としてちゃんとしたものにしましょう、ということです。岡崎の場合は立派な冊子

になっておりますが、全市町と全都道府県と全301人以上の企業で作るべし、ということになったんですね。私もちょっとここに参加させていただきまして、頑張っただけです。作ってどうなったのかというと、やっぱり少子化なんですね。まだまだ子どもが増えていないんです。ところが明るいニュースも少しあるんです。平成18年に入りましてから3月~7月で出生数や子どもの数が増えている所がちょっとづつ出てまいりました。岡崎も少し増えているんじゃないかと思えます。それはさっきいきましたように非婚じゃなくて、いずれは生むわといていた人が生み始めたとか、それから一人っ子ですつときた人が第2番目の子ども、第3番目の子どもも生みます、とか、生みましたっていうようになってきて、それで少し子どもが増えたよっていう所の報告がございいます。しかし厚生労働省は今物を言うことにものすごく慎重になっています。今年が合計特殊出生率が底だとずっと何年も言い続けていますので、ちょっと慎重になっているみたいですね。とにかく人口が増えるかどうか判らないけれども、実質子どもの数が増えている県とか市町もありますよ、と今はなっているという事でございいます。

さて、少子化の影響ですが、これはもう皆さん良くご存知と思えます。例えば社会保障的にいうと2人の若者がひとりの高齢者を支えなきゃいけないとか、3人の若者がひとりの高齢者を支えなきゃいけないとか、色んなデータもありますし、労働力がだんだん少なくなってくるから外国人の方をお願いしないとイケないんじゃないかとかですね。あるいは、定年をもう少し上げましょうとか、色んな事がいわれていますね。労働力が下がるだけではなくて、消費の力も下がっていくんじゃないか、ともいわれています。だけど私は高齢者文化みたいのがきっとあると思うんですね。高齢者の方が消費しないというわけではないと思うんですが、いかがですか皆さん。それにしても、「もったいない世代」だから消費は美德というふうに思わないかもしれませぬ、私もそうですけれども。ともかく色んな見方がございいます。しかし、そういった社会的な影響、経済社会的な影響と同時にですね、子育て環境への深刻な影響もあるんだという指摘がございいます。遊び仲間が居なくなる。つまり先ほど申しました子どもが育つためにぜったい必要な事として、活動というのを入れたわけですが、遊びという活動が絶対必要なんですね。ところが遊びというのは3つの間が必要だといわれています。時間、空間、仲間ですね。塾から塾への細切れの時間帯で遊ぶのでは十分遊べない。それから遊ぶのに安全な空間がなければ遊べない。そしておもしろいよね、そうだよ、明日もやろうねといえるような仲間がいないと遊べない。つまり時間、空間、仲間。この3つの間の中でも仲間の存在が一番重要だと思います。子どもというのは遊び仲間をくぐって育つという言葉があります。逆にいうとですね、遊び仲間がいないとなかなか育っていけないという事なんだろうと思うんですね。ところがこの少子社会になりますとなかなか遊び仲間がいなくて、ということになってしまいます。

それから子どもへの期待が大変大きいんですね。いろんな意味での期待が大きいので、子どもがその期待に応えよう、応えようと思って過剰適応をしてしまう。昔は内弁慶という言葉がありましたが、最近内弁慶じゃないんですね。外弁慶です。外ではやりたい放題、でも親の前に来ると親が期待する良い子になってしまうという現象が起きています。これはやっぱり過剰適応という事だと思うんですね。そして、お子様産業の問題もあります。これはまた凄いことでもあります。たとえば、子どものお誕生日パーティ

っていうと今はケータリングですよ。ケータリングなんて言うと恰好良いんですけども要するに出前ですね。お誕生日のご馳走セット、お飾りセット、なかには着ぐるみまで一緒にケータリングについてくるようなパーティがあるということも聞いています。

それからですね、写真館で記念写真というのもあるそうです。七五三とかそういう記念写真だけでなく、写真をたくさん撮りましょう、みたいな親御さんがいたりするらしいですね。私、記念写真は悪い事ではないと思うんですが、要するにお子様産業にのせられて、なんだか沢山お金を使っちゃうという所があるのかな、ということです。それで、結果として子育てにはお金がかかるということになるのかな、という感じもいたしますね。

5. 岡崎市次世代育成支援行動計画「おかざきっ子 育ちプラン」概要

さてそれでは、この全国展開されました少子化対策の行動計画でございますが、これは岡崎ではどうなっているのかという事です。タイトルは「おかざきっ子 育ちプラン」といいます。「おかざきっ子」の次の、ここのハートがミソなんです。ハートですね、心で育てようという私も策定会議のメンバーの思いがここにあるんですね。ただ単に知恵や技術や支援やお金だけではありませんよ。やっぱり子どもを育てる心が大事じゃないですか、という事で、このハートを是非タイトルに入れて欲しいという事を事務局をお願いいたしました。全国の行動計画を見ましてもタイトルにハートの入った行動計画はございません。岡崎だけです。それからその次ですね。「羽ばたく夢、子どもとともに育つ町、岡崎」じゃないんです。「大好き岡崎」っていうのが入っているんですね。この「大好き」っていう非常に主観的な言葉が入った行動計画も他にはございません。他所は、のびのび育つ町とか、元気に育つ町とか、それから一人ひとりが大切にとか、そういうのは沢山あるんです。「大好き」っていう極めて主観的な言葉が入った行動計画は他にはないんじゃないかなと私も自負しているわけです。

この行動計画は随分前に出たんでございますが、皆さんご覧になった事ございますか。これはパソコンでも検索できますので、うちに無いわという方はちょっとパソコンで見ただけとよくお判りいただけると思うんです。

これはね、どんな事が書いてあるかという、3つの柱がございます。子どもがいきいきと育つまち、家族がともに育つまち、地域がすすんで支えあうまち。2番目がいいでしょう。「親も子どもとともに育っていく」というのですよ。それから新米のおじいちゃんおばあちゃんも孫とともに、おじいちゃんおばあちゃんとして育っていくのよっていう思いなんですね。3つ目は、そうはいつでも家族だけで子育てするというのは今とても大変な時代ですから、支え合っていきましょう、子育てという事に関しても地域が支え合って行きましょう、ということです。この3つを柱といいましょうか、理念というふうに決めました。

そしてここでの子育て支援は、ただ単に保護者の子育てを代わってやってあげるとか、保護者に手助けだけをするという事ではなくて、あくまでも主人公は子どもです。そしてその基本は家族なんだという事ははっきりさせよう、という思いです。そして地域の力を再生する事で子育てがしやすい、そして子どもが育ちやすい、そういう町づくりをしたい、そのための基本の行動計画なんですという事で作ったのがこれなんですね。な

ので、是非見て頂きたいと思うんです。

次に、じゃあ行政というのはどうなのかというと、親とか家庭は支援されるばかりではなくて、主体的に自分達らしく子育てする人達で、行政はそれを支えるんだというようなポリシーをはっきりさせたわけなんです。しかし、決して精神論だけではありません。ハートとか大好きというだけではなくて、例えば「子どもがいきいきと育つ町」というこの理念のもとに推進すべき施策といたしまして、いじめ、不登校、閉じこもりの子どもたちへの対応をもっと充実させましょう、相談体制を充実させましょう、児童虐待防止対策をもっと充実させましょう、子どもの健全な居場所作りを推進しましょう、子どもの交流事業をもっともっと活発にしましょう、という所から始まりまして、子育てを支援する生活環境の整備といたしまして、良質な住宅の確保、そして安全な道路交通環境、犯罪の防止、安心して集う事が出来る環境整備、子育てバリアフリー、つまりどこへでも子どもを連れていけるようなそういう町づくりにしましょうよという事でこういう計画を作ったわけでございます。

私、これを作る時に色々思う事がたくさんあったんですね。皆さんの思いもたくさんございました。「子どもがいきいきと育つ町」という、この柱の所のトップに子どもの人権の尊重ということを入れていただきました。一番最初に、まず育つ主体である子どもがその人権を100%大事にされる、そういう町であり、それを支える人づくり、それがこの行動計画の神髄といっても良いんじゃないかなというふうに思ったものですから。この人権の場所に行ったり来たりしたんです。いろいろあったんですけれども、子どもの人権を大事にする、ということトップにしたいね、という事でトップになりました。

先ほどからたびたびお伝えしておりますように、このプランを策定いたしました時に関わって頂きました委員さんは、例えば私立幼稚園の代表の園長先生とか、それから保育園の代表の園長先生とか、PTAの方々とか、広い方々からご意見を頂いて策定してまいりましたが、そこでの思いといいますのは、先ほど申しましたように箱づくり、物づくりではない、経済支援だけではない、ハートで育てる、ということでした。そして子どもを主人公として、そしてその人権を尊重して、それを支える人づくり地域づくりをする事を一番に考えましょうね、という熱い思いでやりました。

「はばたく夢、子どもとともに育つ都市(まち)、大好きおかざき」このロゴがここに落ち着くまでに何回も臨時の会議が開かれました。非常に熱い思いをもって作った行動計画です。なぜこんなに熱い思いを出す事が出来たかといいますと、やはり委員さんというのはその世界の代表の方でいらっしゃるわけでございますけれども、それぞれ例えば幼稚園では幼稚園において、保育園では保育園において、あるいは市民生活の場では市民生活の場において、やっぱり岡崎という町は子どもを大切に心から愛する、そういう風土といいましょうか、文化と言いましょうか、そういうものが大変強く残っている土地柄なんじゃないかなと思うんです。

実は私、この岡崎市以外に同じような行動計画の策定に3つぐらい関わらせていただいているんですが、岡崎が一番熱かったです。策定会議に出席しておりまして子どもへの思いが一番熱く表現されました。そういう意味で、合計特殊出生率も下がっており、まあ結婚しなくても良いかという人も増えていますが、岡崎という土地柄全体としては

子どもをとてとても大事に、地域の宝物というふうに考える人達が多いのではないかなと私は思っております。

6. 岡崎の子育て事情

まず自然的な環境といたしましては、皆さん感じていらっしゃる通りなんです、実はそれぞれの小学校とか地域にですね、ビオトープというのが幾つも作られているんですね。皆さんの地域にもございますか？ビオトープ。ビオトープの地図を見ると本当にたくさんあるんです、岡崎市内には。また、探索したりお散歩していただくといいかと思うんですが、ビオトープっていうのはあらゆる植物や動物、それが水辺だとかあるいは、水の中にいたとしてもあるがままに大事にしましょう、というところなんですよね。そういう所がたくさんございます。

それから子育て支援事業。先ほど言いましたように、この策定プラン - 行動計画 - は、本当に中身の濃いものがございます。心で育てるといふふうな事を申しましたが、やっぱり先立つものが必要ですので、じゃあ具体的な経済的支援はどんなものにしましょうかという事で、児童手当とか出産祝い金とか、あるいは幼稚園就園奨励費、補助金制度とか、いろんな経済的な支援が整理され、また拡充されました。これは策定した当時のものですから、今はもうひとつこれが拡充されていると思いますけれども、とにかくこの行動計画の中にはこういう形で経済的支援の充実を図るという事でまいりました。

それからですね、ちょっと面白いものを見つけたんです。「育サポ」のサイトです。育児支援情報と国内最大級の授乳室検索っていうサイトがあるんですね。ここでちょっとご覧いただきたいんですけども、これは愛知県の子育て情報といってもいいと思うんですね。それぞれの市町について幾つぐらいの情報があるか、を見てみました。名古屋22でしょう。豊橋3でしょう。一宮1でしょう。瀬戸1、半田2、春日井1、豊川1、津島1、碧南0、刈谷6、豊田3、安城9、わざわざ飛ばした岡崎は何と53なんです。つまり子育てでちょっと困った、悩んだ、っていうお母さん、お父さんが、パソコンで育児サポートの情報を検索してみると、圧倒的に他の市町のものよりも何倍もたくさんの情報があるという事なんです。非常に子育てを大事に考える、そして自分の体験を人にも伝えてあげましょう、自分が体験した子育ての情報を他の人にも教えてあげたいわ、という気のいい親御さんがたくさんいらっしゃるという事ではないでしょうか。そういう土地なんだなという事を改めて思いました。

そうはいいまして、8ページを見て頂きますと、やっぱり子育てをしている保護者の感じ方といたしましては、例えば子どもが正常かどうかちょっと心配とか、子どもの事でいろいろある事があるとか、不安になるとか、そういうふうに答えていらっしゃる方も、「よく」という方は多くないんですが、「時々」という方はたくさんいらっしゃいます。

それから親の悩みといたしましては、例えば子どもの健康についてとか、子どもの育て方だとか、或いはまた子どもの交友関係、勉強や進路も悩みの種です。小学校に行きますとこの辺も悩みの種であり、気になる事のひとつとじていらっしゃる岡崎市民の方は少なからずいらっしゃるというデータもございます。

そこで、最後の結論でございます。岡崎で子どもを育てるといふ事は比較的やりやす

い、といってよいと思います。それはもう地域の文化もそうですし、子どもを大事にしてきた歴史もありますし、情報の多さもあるからです。その結果、まだまだ若い町といえますが、やはり少子化の傾向にありますので、これをここで食い止めるには解決すべき課題を地域で支え合って解決していける、そういう町にする事がもっともっと岡崎を若い町にしていくのではないのかなと私は思います。

大変資料が見にくかったり、あるいはお話があちこちに飛びましてご理解いただきにくい所が多々あったかと思いますが、一応用意させていただきましたお話はここまででございますので、一旦ここで閉じさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。